



# ふおーらむ

第15号

# 目次

## 巻頭特集

第20回「図書館サポートフォーラム賞」表彰式……………2

挨拶：山崎久道氏

表彰講評：水谷長志氏（代読：木本幸子 表彰委員）

受賞者挨拶

奥泉和久氏

小山騰氏

公益財団法人大宅壮一文庫 大宅映子氏

前園主計氏

## 文集

山内明子「俳句八句」……………15

大村英正「川柳・自由吟（雑吟）」……………16

小川千代子「愛知県東栄町役場倉庫火災現場見学記」……………18

門倉百合子「『マドロスの悲哀』、あるいは、  
レファレンスブックの典拠について」……………20

末吉哲郎「老人ホーム紹介と川柳」……………23

福地享子「築地から豊洲へ。銀鱗文庫の引越し」……………24

山崎久道「『情報貧国ニッポン』補遺」……………26

水谷長志「【改稿転載】若き図書館員とこれから図書館員に  
なろうとするあなたへ送りたい10のメモ」……………28

## 編集後記

# 第20回図書館サポートフォーラム賞授賞式

於／2018年4月23日(月)

喜山倶楽部光琳の間(日本教育会館内9階)

## 1. 挨拶

### 山崎久道氏

(図書館サポートフォーラム代表幹事)

図書館サポートフォーラムの代表幹事を務めさせていただいています山崎久道でございます。

ただいまご紹介いただきましたとおり、当会が図書館サポートフォーラム賞の表彰活動を始め、今回は20回目を迎える大変記念すべき表彰の年となりました。

この賞は、本日も会場にいらっしゃっている初代の代表幹事である末吉哲郎さんが、3つの目標を掲げて創設されたものとして、私は理解しております。

1番目は、図書館やそれに類する機関の中で、地道に専門的な活動を続けられ、優れた業績をあげられた方です。例えば目録や書誌を作成

されたり、資料収集やレファレンスなどの活動に従事されたり、図書館経営に尽力されたりした功績などが挙げられます。図書館員、あるいはアーキビストや学芸員の方々というのは、世の中で中々日の当たらない存在ですが、非常に優れたお仕事をされている方はたくさんいらっしゃいますので、ぜひ顕彰させていただきたいというのが、第一の目標となっております。

2番目は、図書館を社会の中できちんと位置づけていくことが非常に大事だということです。私自身の限られたものの方ではあります。日本の社会は図書館に対して必ずしも十分な評価を与えているとは思われません。例えばアメリカやイギリスでも、図書館に投資をする、そのお金が何倍にもなって社会に還つてくるといふ、いわばROEとかROIに相当する図書館における投資収益率というものを社会的に計算しているケースが大変に多いという事実があります。そういったデータを見ると、大体

4倍ぐらいのお金が社会に還元されているという計算をしています。残念ながら日本ではそういった統計データを見たケースはほとんど無いですが、図書館はその所蔵する資料などを通じて、多くの人が勉強したり、人生の悩みについて考えたり、生活を改善することができ、大切な情報資源を蓄積・提供する組織と思われる。その割に日本では、そこに対する社会的な評価が十分ではない。そこで図書館、あるいはそれに類する公文書館や博物館などを、社会の中で正当に評価されるよう努力をされてきた方を顕彰させていただきたいというのが、第二の目標となっております。

3番目は、図書館の活動はいうまでもなく日本一国だけで成り立つものではありません。例えば発展途上国の図書館活動の援助をしたり、あるいはそういった所にボランティアで行ったり、素晴らしい活動に従事された方がたくさんいらっしゃいます。こういった国際的な図書館に関わる活動に従事された方を顕彰させていただきますというのが、第三の目標となっております。

こういった専門性、社会性、国際性といった三つの観点を柱にして、表彰活動を行っております。

後で表彰委員の本木さんからご紹介がありますが、今回も大変に素晴らしい受賞者の方々が

お迎えすることができました。これまでの20回に渡る表彰活動について、事務局から皆様のお手元に資料をお配りいただいています。これを見ていただければ、実に多種多様な方々が受賞されてきたことがお分かりになるかと思えます。

最後にこの図書館サポートフォーラムにしまして、日外アソシエーツ株式会社が並々ならぬご支援をいただいたおかげで、この表彰活動がここまで長く続けることができたことに、皆様とともに厚く感謝を申し上げます。

ぜひ20回の記念すべき表彰式として、華やかに、かつ意義深く執り行いたいと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

## 2. 表彰講評

### 水谷長志氏

(表彰委員会委員長)

図書館サポートフォーラムの表彰委員長をしております跡見学園女子大学の水谷と申します。本日は本務校の講義が入っておりまして、生憎と欠席いたしますが、表彰委員の本木幸子様にて代読をお願いいたします。

早速ですが、第20回図書館サポートフォーラム賞の表彰結果について、ご報告いたします。

その前に、第1回図書館サポートフォーラム賞は、1998年2月15日に授賞式が挙行されましたことをあらためてふり返りたいと思います。第1回の受賞は、山形県川西町の故井上ひさし氏蔵書を納めた遅筆堂文庫様、MK図書館研究所主宰・元国際基督教大学図書館長の鬼頭當子様、前日本図書館協会利用教育委員会委員長・慶應義塾大学名誉教授の濱田敏郎様、前銀行協会図書館長の藤田幸弘様の4名に贈られました。以来、途絶えることなく、ここに20回目の図書館サポートフォーラム賞の授賞式が開かれることになりましたのも、フォーラムの会員のみなさま、山崎代表はじめ幹事のみなさま、そしてなによりも推薦者と非推薦者のみなさま、そして歴代の受賞者の皆様の価値あるお仕

事とご協力によるものと、あらためてお礼申し上げます。

今回は、図書館サポートフォーラムの会員および事務局より、個人6名、団体4件、10件の表彰候補が推薦されました。

この数は昨年の11件とほぼ同数ですが、団体が結果として、昨年より1件少ない候補の数となりました。

今年もまた、受賞の個人、団体は、図書館員および図書館自体が図書館界をサポートされ、図書館活動を推進するお仕事をされていて、いずれも高い業績と評価をすでにお持ちの方々でありました。

選考は3月13日、大森の日外アソシエーツにおいて11名の出席幹事による投票および6名の不在幹事の通信投票によることとなりました。今年も出席幹事も多く、出席・不在のあわせて17名の幹事による投票が行われました。昨年にも増して投票の結果は拮抗しました。厳正かつ公正な選考経過の結果として、昨年と同じに、例年よりも1件多い4件で落着いたしましたが、今回は特別に、出席幹事の中にフォーラム賞の第20回目を記念したいという強いお心持ちがあり、現在ただいまのフォーラム幹事の世代よりも大方一世代前の先達について、20回というこの節目に合わせて表彰するという結果になりました。すなわち、この度の第20回の図書館

サポートフォーラム賞は、奥泉和久様、小山騰様、公益財団法人大宅社一文庫様、そして特別表彰に前園主計様の個人3人様と1団体様が受賞されることになりました。

では、第20回図書館サポートフォーラム賞の表彰理由について述べさせていただきます。

まず、最初に個人表彰として奥泉和久様の表彰理由を読み上げます。

#### ○奥泉和久氏（法政大学 非常勤講師）

／元 横浜女子短期大学図書館

奥泉和久氏は長く大学図書館の現場において勤務されつつ、『近代日本公共図書館年表 1867～2005』をはじめ多くの図書館史に関わる著作を公刊され、日本図書館文化史研究会の編集による『図書館人物事典』を先導して大きな成果を残して、近年の図書館史研究の活性化に大きく寄与した。中でも『図書館史の書き方・学び方』は、近々、韓国図書館協会から翻訳・刊行される予定があるなど、同研究領域において後進および海外への波及浸透をもたらすものがあり、まさに図書館サポートフォーラム賞にふさわしく、高く評価して表彰するものである。

いささか幽霊会員ながら、昔から私も図書館文化史研究会の一会員であります。定期的に送られてくる同研究会の会報から、近年の活

動について、瞠目させられることが多く続いておりました。ことに、2007年の20人の評伝集である『図書館人物伝』に次いで刊行された2017年の1、421人を取り上げた『図書館人物事典』は、未定稿であった石井敦氏の『簡約日本図書館先賢事典』をこの時点で望みえる限りの定稿として仕上げられた事業は、一研究会の枠を越えて、大きな成果を図書館史研究の領域に残したと言えるでしょう。

この本書の「あとがき」は同書編集委員を代表して、奥泉様が書かれています。その末尾には、「ますます専任の図書館員が減少の一途をたどるような状況のなかで、なぜ図書館員が必要なか理解を広めるためにも、いつの時代にも知の宝庫を守り、知を共有するために尽力した人たちがいたことを伝えていく努力が求められるのではないかと書かれています。私どもの図書館サポートフォーラムも、そしてフォーラム賞もまた同様のつとめと願いから発していると考えておりますので、今回、奥泉様を記念すべき20回目の受賞者にお迎えてきたことは大変、嬉しくもまた光栄に思われてなりません。

次いで、同じく個人表彰の小山騰様の表彰理由を読み上げます。

#### ○小山騰氏

（元・ケンブリッジ大学図書館日本部長）

小山騰氏は1985年から2015年までケンブリッジ大学図書館日本部長を務められた。同図書館が所蔵する膨大な日本語コレクションには、英国三大日本学者のサトウ、アストン、チェンバレンをはじめとする明治時代の外国人たちが持ち帰った数々の貴重書が残され、平田篤胤や本居宣長らの国学から始まる日本研究の歩みが所蔵されている。2017年出版の著書『ケンブリッジ大学図書館と近代日本研究の歩み―国学から日本学へ』は「国学⇩日本学⇩日本研究」という変遷について、サトウら三人にフォーカスして明示したことの意義は、今後の海外における「Japan Studies」の発展を考える上でも貴重な示唆となっており、まさに図書館サポートフォーラム賞にふさわしく、高く評価して表彰するものである。

いささか私事でございますが、この三月末で退職した東京国立近代美術館におりました2014―2016の三年間は、文化庁の補助金によりまして、「海外日本美術資料専門家（司書）の招へい・研修・交流事業」、通称JALプロジェクトを企画実現いたしました。これは海外にあって日本の美術および日本研究に関わって、特に資料面から司書、ライブラリアン

として実務に携わる方々を日本に招聘し、研修交流するものでした。当然、ケンブリッジ大学の日本資料コレクションの担当であった小山様にもコンタクトしましたところ、ちょうどご退任されて、アメリカのハーバード大学で博士の学位を修められた才媛を後任に迎えられておりました。その後任のクリスティン・ウィリアムズさんも最終年の2016年のJALプロジェクトにご参加いただきました。

このように海外の日本研究機関で日本関連資料を預かって、海外における「Japan Studies」の発展に図書館員として寄与している日本人が少なからずいらっしゃる、その現場・現状をこのプロジェクトを通して知ることになったわけです。

日本国内におけるこの職業の困難さ、については先ほどの奥泉様の言葉にもある通りですが、海外の日本人図書館員も、例えばCJIKとして並び称される中韓の攻勢にあつて、なかなか厳しい現実も垣間見られました。そのような環境の中から、実務をこなしつつ本書のような、他に書き手が居ない内容のご著作を著された小山氏のご研鑽は、多くの後続の同業を志す者に大きな励みを与えていると強く思うところです。

次いで、団体表彰の公益財団法人大宅壮一文庫様の表彰理由を読み上げます。

#### ○公益財団法人大宅壮一文庫

著名な評論家であった大宅壮一氏の没後1971年に雑誌専門の個性ある公開専門図書館として半世紀の長きにわたり活動する私立図書館（現公益財団法人）の本文庫は、国立国会図書館や公共・大学図書館が収集対象として軽視してきた、きわめて多数の一般大衆誌に注目し、独自の索引・分類方式を開発して、とりわけ報道活動への大きな貢献を果たし、1982年にはその実績をもって第30回菊池寛賞を受賞している。近年の財政難にもクラウドファンディングを通じて体制を堅持しているが、あらためて図書館人が同文庫の価値を再評価することを期待し、図書館サポートフォーラム賞にふさわしく、高く評価して表彰するものである。

表彰理由においても触れましたが、大宅壮一文庫は1982年に菊池寛賞を受賞されています。報道・編集関係者にはとみに著名な文庫ですが、なぜか図書館界においては、その功績と実力が正しく伝わり、認識されていないのではないかとということが、推薦者より述べられました。私も同感ではありますが、これは逆に言えば、図書館員の側にユニークで特異な図書館を

構想する、あるいは妄想する力の弱さではないか、と思うところでもあります。例えば、いまの図書館に、大宅壮一文庫の蔵書構築の凄みや膨大な記事への孤高独立のアクセス術の開拓において発揮される進取卓拔さなど、真似ようにも真似られないでしょう。

まずは図書館人がこの文庫を使いこなす愉悦を知ることから始めていたのだと思います。私自身はかなり以前、現代彫刻の分野で独自の世界を切り開いた若林奮（いさむ）の東京国立近代美術館での展覧会に際して書誌を編んだのですが、その中に女性雑誌「アン・アン」に向田邦子が「男性鑑賞法」というエッセイで若林奮について書いている、その記事を展覧会カタログの書誌の一項に加えられたことを喜びとともに記憶しています。この記事を実際に手にしたのは、まさに大宅壮一文庫でした。向田邦子と若林では、普通の探索術では繋がらない関係の、このような記事も、大宅文庫でなら、大宅文庫の索引からなら見つかる、という鮮烈な感動を覚えたことをいまでも思い出すのです。

次いで、特別表彰の前園主計様の表彰理由を読み上げます。

○前園主計氏（元・山梨英和大学教授）

前園主計氏は、1956年慶應義塾大学文学部図書館学科を卒業、同年4月（財）日本生産性本部に就職、1960年には米国コロロンビア大学スクール・オブ・ライブラリー・サービスに留学、40余の米国専門図書館を訪問し、帰国後「アメリカと日本の専門図書館」『図書館雑誌』（1962年3月）を著した。以来半世紀を越えた旺盛な著述活動、専門図書館協議会、日本ドクメンテーション協会等での先駆的活動、青山学院女子短期大学ほかでの教育や啓蒙活動を通じて、日本の図書館界を先導されたことは余人をもって代え難く、まさに図書館サポーターフォーラム賞特別賞にふさわしく、高く評価して表彰するものである。

あらためて図書館サポーターフォーラム賞の歴史を辿りますと、第1回の4名の受賞者から昨年の第19回まで実に58の個人・団体の受賞者がいらっしやいます。2009年の第11回では、本フォーラムの創設者である末吉哲郎様が図書館サポーターフォーラム賞特別表彰を受けられております。

冒頭述べましたように、「20回目を記念したいという強いお心持ちがあり、現在ただいまのフォーラム幹事の世代よりも大方一世代前の先達について、20回というこの節目に合わせて表

彰」させていただく仕儀とあいなりました訳でございました、その一世代前の先達ということでは、フォーラム幹事の多くが専門図書館畑の出身が多いということもありますが、戦後、日本の専門図書館において実践と理論の双方においてきわめて大きな業績を残された前園主計様が第20回における特別表彰にまさに相応しいでしょうということになったのであります。そして、授賞式へのご出席もご快諾いただけて本日を迎えることができました。

第20回を迎える図書館サポーターフォーラム賞も、この賞の3つの柱にかなって、長年の研鑽と国際性、そして図書館のあることの意義の発露顕現をよく示すお3方と1機関に受賞いただきました。今回、例年にない、フォーラム賞とフォーラム特別賞の4件の受賞者を得ましたことを、表彰委員長として、ことのほか嬉しく思っております。

以上をもちまして、簡単ではございますが、今回の図書館サポーターフォーラム賞の表彰者のご紹介とさせていただきます。ご静聴ありがとうございます。ありがとうございました。

### 3. 受賞者挨拶

奥泉和久氏

(法政大学 非常勤講師)

／元 横浜女子短期大学図書館

この度「第20回図書館サポーターフォーラム賞」をいただいたことに、厚くお礼を申し上げます。そして、これまでご指導をいただいた諸先輩方、いろいろと助けていただいた仲間の人たちに感謝をしたいと思います。

さて、何をお話したらよいかと考えたのですが、大きな受賞理由となった『近代日本公共図



書館年表」(日本図書館協会、2009、以下「年表」)について、少々思い出したことがありますので、それについてお話しをしようと思います。この本の成立の経緯については「まえがき」に記しましたが、そこに書かなかったことです。

ひとつ目ですが、「年表」には、項目数などが書いてありません。どうしようかと思つたのですが、「面倒なので数えませんでした。じつは、この本の巻末に、文献を2,276あげていますが、そのあとに略号というのが10タイトルほどありまして、『図書館雑誌』や『みんなの図書館』などは1タイトルとして挙げています。『図書館雑誌』は、2007年の時点で1,000号を発行しています。実際は、それぞれのタイトルから多くの記事を拾っています。今回、受賞記念に、どのくらいの項目と文献が掲載されているかを調べてみました。

採録した項目数は、13,069、出典として明示した文献数は、11,587でした。

もうひとつは、この本のスタートがどこだったかということです。25年前より少し前のことです。当時東洋大学の石井敦先生に、横浜の喫茶店に呼び出されました。そこで「年表、作ってもらえないかな」というそのひと言でした。この頃、日本図書館協会は、創立100周年を迎えるにあたって、記念誌を編集していました。

そのときに、協会の歴史とは別に、全国の図書館員を動員して、北海道から沖縄、それに旧植民地を含めた全国の県別の図書館史を作成するという企画が立てられていました。これは『近代日本図書館の歩み・地方篇』(日本図書館協会、1992、以下「地方篇」としてまとまりますが、これを企画したのは石井先生です。

このときに、石井先生は、各県の図書館史の後ろに、「年表」を載せることを考えました。それを作成してもらうように、各県の執筆者に依頼をしたのですが、どうも原稿の集まりが悪かったようなのです。また、提出されてもその書式がさまざまで、手に負えなくなって、だれに頼もうかということになり、それで「年表、作ってもらえないかな」ということになったのです。

原稿があつて、それに年表を付録として作るだけです。大したことはないと思つて、私は「いいですよ」とひとつ返事をしたわけです。ところが、いま、思い返してみると、各県の執筆者が、協会がお願いしたとおりに「年表」を作ってきてくれたら、私は、呼び出されなかつたでしょうし、それと「年表」は、あくまでも「付録」ですから、もし、石井先生が、仕方ないから「年表」はなくてもいいか、と考えたら、やはり私は、呼び出されなかつたと思います。そう考えると、この本ができたのは半

ば偶然だったということですが。

では、実際に、どう進めたのかというと、「地方篇」の原稿の査読は、石井先生と当時法政大学の小川徹先生が担当していました。原稿の整理が終わった県から順に「年表」を作成していきます。ところが、この当時、お二人は大学の先生をされていましたから、なかなか忙しい。そこで、まとまった時間を確保するために、いろいろな施設を借りては、そこで何日か、朝から晩まで作業をするということをしました。大量の原稿が入った段ボール箱を車で運んで行くわけです。

多分それは2年間くらいだろうと思います。が、年に数日は、この二人につきっきりで図書館史漬けの日々を送ることになります。当然、休憩もしますが、そこで話題になるのは、過去の図書館のことであり、いまの図書館の在りようであり、そしてこれから図書館はどうあるべきか、ということですが。そうした話のなかで石井先生が、「図書館にもきちんとした年表が欲しいよね」というようなことを言い出します。そうすると、すかさず小川先生は、「それは、大事なことですな」とそこまではいいのですが、「それはあなたの仕事だね」というように私に振るわけです。それで何となく、全項目に出典をつけた、きちんとした年表を作成する、

というような企画ができ上ってしまった、というわけです。

そうしたことを思い返してみると、この『年表』は、半ば偶然が作用してスタートして、雑談から企画が生まれた、ということになります。では、それはどういう意味をもっていたのか、というと当初から学術的なものを作ろうということが動機にあつたのではなかったということですが。では何かというと、図書館の現場から積み上げた問題意識がもたれている、ということですが。年表の作成は、日本図書館協会の100年史をまとめることを目的に始まりました。これは日本の図書館のあるべき姿を、時間的な検証を経た事例に学ぶという姿勢で取り組んだものですし、図書館をどう引き継いで、図書館はどうあるべきかを模索するという、一連の作業の一環だったと思っています。

結果だけ申し上げますと、いろいろ調べなくてはいけませんので、あちこち資料を求めて出かけるなどして、『年表』の作成にはそれから約15年かかりました。そして、9年を経て現在に至ります。ありがたいことに、いまでも『年表』を参考にしているよ」というような声をかけていただくことがあります。私は、本を書く、もうその本については作った者の役割は終わるものと思っていました。ところがそういう

ことばを聞くと、書くということは後々まで責任を伴うものなのだ、ということを考えるようになりました。そこで今回の受賞ということになり、なおさらその責任の重さを実感しているわけです。

調べたり、考えたりすることは、これでいいということではなく、これからも時間を見つけては調べ歩く、という生活を続けていくということになりそうです。この賞は、そうしたことに対する叱咤激励だと思いますので、いずれ何らかのさらなる成果をご報告することをお約束して、これをもってお礼のことばに代えさせていただきます。

本日は、ありがとうございました。

## 小山 騰氏

(元・ケンブリッジ大学図書館日本部長)

このたび、名誉ある図書館サポーターフォーラム賞をいただくことになり、大変光栄に思っております。また、大変感謝しております。たまたま海外に在住している関係で、4月23日に開催される授賞式に参加することができず、大変心苦しく思いますが、かわりに英国からこのメッセージをお送りして、今回同じ図書館サポーターフォーラム賞を受賞されるみなさまと一緒に受賞の喜びをわかち合い、また同時に図書館サポーターフォーラムの関係者のみなさまへの感謝の意を表したいと思えます。まず最初に厚くお礼申し上げます。

今回の受賞は、直接的には昨年刊行いたしま



した『ケンブリッジ大学図書館と近代日本研究の歩み・国学から日本学へ』という出版物に對するものでありますが、受賞する本人としては、海外、特に英国を含めたヨーロッパで日本研究のために日本語コレクションを担当している図書館員を代表していただくものであると理解しております。日本ではCEAL (Council on East Asian Libraries, 東亜図書館協会) の活動など、アメリカの図書館における日本語コレクションの事情は割と知られておりますが、比較的ヨーロッパの方の情報が手薄になっているように思われます。そこで、今回の受賞でEARS (European Association of Japanese Resources Specialists, 日本資料専門家欧州協会) などの動きにも注意が払われるようになるのではないかと考えております。というのは、『ケンブリッジ大学図書館と近代日本研究の歩み・国学から日本学へ』の主要な部分については、2016年にブカレストで開かれたEARSの大会で発表したものであるからであります。アメリカだけに限らずヨーロッパにも日本の資料は所蔵されております。

また、『ケンブリッジ大学図書館と近代日本研究の歩み・国学から日本学へ』については、実はもともと企画していたケンブリッジ大学図書館の日本語コレクションの歴史に関する書籍

の前半部分にあたるもので、その前半部分が大きくなったので、まずその部分を一冊の本として出版した次第であります。後半部分にあたるケンブリッジ大学図書館やロンドン大学東洋アフリカ学院(SOAS)の近代日本語コレクションの歴史については、近いうちに刊行したいと考えていて、戦争と図書館というテーマにそって、英国における近代日本語コレクションの歴史をまとめる予定であります。

私は日本で6年間図書館に勤めた後、海外では合計34年間ほど図書館員として働き、2015年9月末で定年退職いたしました。図書館員の資格を取ったのも英国で、ほとんどの図書館員生活は英国でおくりました。インターネットの出現などにより世界の状況は大きくかわりましたが、取り分け図書館を取り巻く環境は激変したように感じられます。日本でも状況はほとんど同じであると想像いたします。退職した後も週一度ボランティアとして前の職場で働いておりますが、最近の大学図書館の変化に追いつくのに四苦八苦している状態であります。Library Discovery ToolなどよりもOPACの方に親しんだ世代で、さらにそれよりも以前には、図書館員として図書館のカード目録を配列しておりましたが、むしろそのような作業をしていた時代が懐かしく感じられます。現在

では、英国にいてもYouTubeなどで日本のテレビ番組なども見ることができ、日本の情報は簡単に手に入りますが、以前は船便で日本から送付される書籍小包に詰め物として入っている古新聞を読んで日本の話題などを知る時代もありました。

過去にも、海外で活躍した図書館員などが図書館サポートフォーラム賞を受賞した例がありますように、図書館サポートフォーラム関係者は海外にも目を向けて来ました。ただ、時代の流れとして図書館のグローバル化はますます加速しております。日本と海外との垣根はまた一段と低くなっております。デジタル化などで貴重書、古典籍、写本、文書、雑誌論文など、さらに通常の書籍までがインターネットで利用できるようになると、インターネット上では、それらの資料はもともとの所蔵館から離れて、あたかも地球規模の図書館から提供されているように感じられます。そのような図書館のあり方までが大きく変わろうとする時代なので、社会的な枠組みなどを乗り越えて活動される図書館サポートフォーラムの役割はますます重要さを増すものと期待されます。今後のご活躍をお祈り申し上げます。

## 公益財団法人大宅壮一文庫

(理事長・大宅映子氏)

どうも皆さまこんにちは。大宅映子でございます。

この度は図書館サポートフォーラム賞をいただきまして、本当にありがとうございます。聞き及ぶところによりますと、この賞は元図書館に勤めていらした方が中心で、図書館のより良い社会的・文化的発展を望んでいらっしゃる方々、言ってみれば、図書館のプロの方々を選んでいただいたというところで、ことさらに嬉しく思っております。ありがとうございます。



大宅壮一文庫っていうのは、まあご存知の方はご存知だと思うんですけども、父親、壮一が生前中に自分が原稿を書くために膨大な資料を集めました。それを引かなくちゃいけないわけです。あるだけじゃダメなんですよね。国会図書館には雑誌はあるんですけど、引くことはできない。

どうやったら活用できるかっていうのが、大宅壮一の発想の原点。で、彼は本というのは読むものではなく引くものだ、と。あるだけで、どこに何があるか分からない。みなさんもやってませんか？ クリップングって、とって、しまつて、どこにしまったか分からない。それは無いに等しいわけです。それを彼独特の索引のシステムをつくって、職員も雇って、で、自分が引いて、書けるようにしたんですね。

うちの父は1900年生まれの1970年に亡くなった。とてもわかりやすいんですけど、明治33年生まれの昭和45年に亡くなったんですが、遺言で、自分の集めたこの雑誌。雑誌に特化します。

本って、子供のころ、うちにはね、児童世界名作全集なんてのはないんです。全然。厚い表紙で硬い表紙でピカピカしてるのなんて全然ない。その代わり、辛亥革命、袁世凱の裏話みたいなのはあるんですね。そうすると社会科学の

レポートは、そういうのを見てやるから、ほとんど講談みたい。「そこで出てきたのが」みたいな話でやるとウケてましたけど、まあ、それは私にとっても活用できたんですけどね。えー、そういう形です。もう雑誌というのは父にとつては。

うちの父はベストセラー「世界の裏街道を行く」というのを出しました。裏街道って、裏っていうのが大好きだったんですね、彼は。その表のピカピカしたようなところは好きじゃなくて。裏っていうか、雑誌っていう、みんながそれこそ項目にも挙げてくれないような、ただあるよ、とかね、あの電車の中の網棚の上に捨てるられちゃうとかっていう、雑誌こそが、彼のいちばん興味のある人とか命とか生活とかっていうものの情報の宝庫だというのが彼の考え。父が亡くなって遺言が出てきまして、この集めたものをどこかの一社の私有物にはしないでくれ、と。マスコミの共有物にして、パブリックに使うてもらえたら嬉しい。で、母はすぐ行動に出まして、いろんな方にお助けいただいて、財団法人をつくったんですね。

この「雑誌を大事にする」っていうか、その「情報に貴賤はない」っていうかね。逆に言うと、そういう、「みんなが捨てちゃうようなもの」のほうが大事」だっていう彼の思想を、あの、ひとつ示すエピソードをご紹介します。

私が旦那と婚約したときに、昭和39年かな、えー、旦那がうちへ来ました。襦袢（どてら）を着ている大宅壮一さんが赤鉛筆を持って、『アサヒ芸能』を読んでいた（会場笑）。

わかります？ 『アサヒ芸能』わかりますよね？ 普通はちよつとあんまりね。昔は『内外タイムス』とかね。今、それ全部ちゃんとした週刊誌と一緒に入ってるっていうのは、それは私、日本の文化としておかしとは思ってませんが、まあそれはいいんですけど、まさか大宅壮一が『アサヒ芸能』を読んでいるとは思わなかった。しかも、赤鉛筆持って、使おうと思ってる線を引きながらっていうのは。うちの旦那、ひっくり返るくらい驚いたんです。

もうひとつ、今、イギリスの話があったんで。1960年だったと思うんですが、日本人は犬をいじめるっていう話があったのを覚えてますか？ あれでイギリス大使館から親父さんが招待を受けまして、イギリスを見て欲しい。それで三鬼陽之助さんと藤島泰輔さんと三人が行く、と。

で、うちの父が、私を通訳として連れて来て、母を看護婦として連れてく、と。行きました（会場笑）。それで、そこに、日本の京大を出た、すごい教養豊かな男性の通訳がいたんです。もうずっとアメリカに住んでる方。それがあるとき、映子さん、どうしても僕にはわからない

日本語があるんだけど、意味を教えてくださいな、と。

なんだと思います？ アングラっていう言葉だった。日本からくる立派なものの中に、アングラなんて解説もないんですよ。週刊誌とか雑誌とか、それこそ内外タイムスっぽいスポーツ紙みたいなどころには出てくるけど、朝日新聞にはたぶん出てこなかったらと思うんですよ。それね、アンダーグラウンドの略なのよ、って言ったたら、もう彼もびっくりして、そんなこと考えもしなかった、と。

だから、そういう人の生活なんかを知ろうと思ったたら、そういう日本の文化っていうのをわかるためには、私はほんと週刊誌っていうのがね、ものすごく重要だと思います。

日本の外務省が外地に行つてぜんぜんダメなのは、そういうのやらないからですよ。表側のばかり集めてるから。ぜんぜん日本のこと知らない人、もし外務省の人がいたらごめんなさい（会場笑）。私もあちこち行きましたけど、本当に日本のこと知らない人たちが日本の外交官、窓口やってるっていうのはね、何度も思いましたから。はい、失礼しました。余計なことでした。

えー、で、おかげさまで、メディアにみなさん活用していただいて、いちばん有名なものは、

あの立花隆さんが、田中角栄研究は大宅文庫がなかったらできなかつたっていうふうに言ってます。徹子の部屋でも彼言ってますし。

ところが、ところが、さっきも話が出ましたインターネット。居ながらにして7割ぐらいの情報收拾ができちゃうわけですよ。チャラチャラっと記事も書いてしまう。しかも、そのメディア自体が地盤沈下。

大宅文庫の場合、テレビが最大のお客様なんで、なんかネタがないと、大宅文庫行ったらなんか企画が引つかかるみたいところがあつたんですけれども。このごろテレビ見てると、見てらっしゃる方わかると思いますけど、コスト削減が全面に出ていますので、なんかタレントが知らない駅で降りてブラブラ歩いてみる、みたいなのはつかりじゃありません？（会場笑）なんなのこれ？っていうふうに思ってますけど、彼らも背に腹は代えられないんだろうな。

大宅文庫が最近、やたらに取り上げられているのは財政難、存続の危機、っていうのばっかり。もう本当にちよつと忤怩たるものがございますけれども、これは本当に世界の流れて、いくらうちの大宅壮一が考えたことはGoogleより何十年も早かつたなんて言つたつて、お金にはならないわけでございます。

で、天声人語から爆笑問題まで。爆笑問題つてご存知ですか、ね。あの2人とデヴィ夫人と

田原総一朗さんとで、大宅文庫へ来て、さあ、誰から金を引き出そうか、孫正義さんがいいんじゃないか。まさかそこを放映すると思わなかつたんですけど、ちゃんと出てきちゃつたりしまして（会場笑）。

ものすごい量の取材を受けて、いろいろ皆さんが心配してくださつて、存続しろ、と言われて、逆に初めて、初めてつてことはないんですけど、こんなに皆さんから大事に思われてるんだなっていうのと、やっぱり、実物の雑誌をその場で見られるっていう凄さね。

あの情報としてバーつと横書きになって出てくるデジタル資料。私、あの横書きはね、斜め読みができないからぜんぜんダメなんです。縦なんかあれ血が通つてない気がしません？ 縦書きになつてたら、サツと斜め読みができて一枚ずつペツペツペツ。私、小学校3年から新聞5紙読んで育つてるもんですから、読むのだけは速い。だけど、横書きなんてのはぜんぜん読めないし、あの、違うものだと思うんですね、私、情報として。

だから、もしいらしたくない方はぜひ大宅文庫にお越しくださいませ。昭和20年代の週刊誌なんか見ると、ああ、こうだったわよね。紙はガサガサでつていうのを見ていただくと、その、ただそれが活字化されてデジタルで出てきたものと全く違うものがあるつて思っているん

です。

ともかく、財政難であることは確かでございます。まして、えー、ただ、もうすぐ潰れるとか、そういう話ではぜんぜんないんです。全体の傾向としてやっぱり下がつていつていつていうことなんですね。

本当に反響の大きさを実感して、これは大宅壮一が発想し、大宅昌が財団法人にし、私はほとんど何にもしない、飾りもんじゃないなもので。この索引をね、作るつていうのが、今日、大宅文庫から3人来てくれますけれど、本当に地味な、何十年もやつてるんです。ありがたうございます。ほんとに。それがなかつたら続てはいないんですよ。

やっぱり、発想して、財団法人にしたとこまでより、その後、続いたところのほうが、ものすごいことだつていうふうには私は思つています。私はただただ名前継いでるだけです。ほとんど役には立つてないつていう気がするんです。えー、これからぜひ皆さんがこれはあつたほうがいいと思つていただければ、ご支援いただけるように、心からお願ひします。ぜひ、これご覧になつてください。なかなか面白くできあがつていきます。今日は本当にありがたうございました。

## 前園主計氏（元・山梨英和大学教授）

本日、身に余るこの栄えある賞をいただき、嬉しさに浸っているところです。本当にありがとうございます。ありがとうございました。

最近、私が無性に腹が立ち、情けない思いをしている報道があります。「していない」と言っていた事柄について、「していた」証拠になる文書が存在したり、「見当たらない」と言っていた日報が見つかったりしているあのニュースです。問題の当人や当局の対応に怒りを覚えます。同時に、行政に携わる人びとが、文書の重要性やその保管整理法をあまり意識していない向きが窺え、呆れています。文書を含む記録物



の保存や、その見つけ方を専門にしてきた図書館界の一人として、われわれの爪の垢でも飲ませたい気持ちがあります。

ご存知のように、図書館のルーツは文書の管理にあります。5千年前、パピルスや粘土板に刻まれた記録物を、証拠として、あるいは流通の手段として保存し始め、その後その活用を図って発展してきたのが図書館です。ここに、たまたま4千年前の粘土板を持っていますので紹介します。これには、ある寺院に遺体を届ける際の連絡事項が書かれているようです。楔形文字で私は読めませんが、添付の説明書にそう書いてあります。多くの粘土板同様小さいですが、これもれっきとした文書です。

記録物はその後、紙が主流となり、さらにいろいろな形状のものが出て参りました。図書館は、形状に応じてその保管や整理の仕方を考案し、内容を探す索引を工夫してきました。記録物の内容は、それを文書、メッセージ、データ、情報など何と呼ぼうと、必要な場合人びとに伝える知識であることを知っていたからです。人びとがその知識を起点に更なる展開を図り、文化を進めていることを知っていたからです。

わが国ではこのところ、文書管理の在り方を再検討する動きが出ています。この分野で先駆的な役割を果たしてきた図書館界は、機会を捉えて、あるいは機会を創り、これまでのノウ

ハウを社会に積極的に披露し、PRすべきだと思っているところです。

過去数十年にわたり、私は産業界に対して資料つまり記録物の重要性を説き、資料室や図書館の役割をPRしてきました。私の勤務先の日本生産性本部が主として産業界向けの事業を展開していましたので、私もこの線上でビジネスマン向けの活動をしてきたわけです。私はこれまで、書籍を含め約350本の記事論文を執筆してきましたが、そのうちの約半分は産業界にいる人びと向けに書いたものです。

私はビジネスマンに対して、資料の大事さだけでなく、資料整理の方法から活字の読み方まで説明し、さらにはそれが自己啓発にも繋がることも強調してきました。この活動の効果を証明することはできませんが、少なくとも執筆依頼が相次いだのは、対象にした人びとの関心と呼んでいたからだと思っています。人びとの念頭に「資料」の意識がある程度インプットできたと思っています

この度のこの賞は、こうした私の活動に対して与えられたものと受け止めています。この経験を踏まえて、図書館界の一人ひとり、持っている思想や技術をもっと社会に発信するよう望みながら、私の挨拶を終えます。

ご清聴ありがとうございました。



俳句八句

山内 明子

寮生の上座にでんと落第生

鮑食ふ裏ごししたる肝と和へ

蟬鳴き止むにじりて雌に乗りたれば

匙にこそぐ鮪中落ち裏も返し

汝なと爛酒酌めば問はるる母子かと

爛酒や来世もと夫あかんべの妻

昨夜よべ脱ぎしセーター着るや肌着ごと

もう一本つけろと父や雪搔いて

# 川柳・自由吟（雑吟）

## 大村 英正

- 一、研究の設備理研はハサミ糊
- 二、花粉減りマスクが減って美女が減り
- 三、オモテナシ裏ばかりが日本的
- 四、てんでんこ、総理、国民、裁判所
- 五、盗らないで僕の憲法自公さん
- 六、合意せずで見事合意の米中間
- 七、反原発打ち水風鈴蚊帳団扇
- 八、また偽装、牛肉、魚、妻の胸
- 九、芝居見せ大臣になる大芝居
- 十、不器用で寡黙で取り柄ない亭主
- 十一、先送り増税子づくりお小遣い
- 十二、我が家でも集団自衛女性軍
- 十三、お年玉貰えば要らぬジジとババ
- 十四、名前だけ印刷賀状読み終える
- 十五、外堀を埋めて裏口から九条
- 十六、新事態持ち出すなんて新事態
- 十七、それはそれはこれだと日中韓
- 十八、日本車でコメを運んで来る予感
- 十九、危機減らすオスブレイ墜ち危機が増し

二十、時々には心構えの震度4

この二十句は平成二十六年五月から平成二十七年六月、朝日新聞「千葉笑い」欄に掲載された拙句である。

- 二十一、株高に浮かれてる間に物価高
- 二十二、事故を事象事件を事故と言う輩
- 二十三、通勤の指定席あり始発駅
- 二十四、人喰っているのか部長肥満気味
- 二十五、知ったふり知らないふりを使い分け
- 二十六、喫煙所後ろめたさの同志感
- 二十七、老妻にや見ざる聞かざる逆らわず
- 二十八、品格の高い病が癌なのか
- 二十九、減りましたトキメキ精力髪貯金
- 三十、聞くほどにつまらぬ話し他人の恋
- 三十一、気に食わぬワシの順番奉加帳
- 三十二、腕白を誉めてやりたい現代っ子
- 三十三、ドキドキの期待裏切る袋とじ
- 三十四、ブラボーと拍手で覚めるコンサート
- 三十五、まえがきと目次で書いた御礼状
- 三十六、肩書きが消えて年賀の温かみ
- 三十七、何食べる出来てから聞く山の神
- 三十八、お薬の解説合戦老人会
- 三十九、会議ではケムに負けずに喫煙所
- 四十、使途思案寝不足続く宝くじ
- 四十一、カーナビに逆らい眠気吹き飛ばし
- 四十二、大相撲四股名そろそろABC
- 四十三、送別会喜怒哀楽は鍋の中
- 四十四、定年前手柄とモテた話だけ
- 四十五、首切った社の求人を許せない
- 四十六、アイディアは赤提灯と喫煙所
- 四十七、いつまでもあると思うな髪と妻
- 四十八、経済の票で福祉を切る予算
- 四十九、再稼働出来る基準が新基準
- 五十、ほぼ全員嬉し泣きです送別会
- 五十一、居れば邪魔居ないと不便部長さん
- 五十二、モノが無く心豊かな時ありき
- 五十三、感動の入れ歯気になる古稀の恋
- 五十四、頑張ったへソクリばらすマイナンパー
- 五十五、小顔ちゃん結婚したらでかい顔
- 五十六、鳴らぬのにケータイで立つ会議中
- 五十七、情報源給湯室と更衣室
- 五十八、混浴は足湯どまりの小心者
- 五十九、取り敢えず軽く言われる瓶ビール
- 六十、初仕事新郎妊婦御入刀

六十一. 行つてらっしゃい妻に手を振る

古稀バジャマ

六十二. 飲み込んだ言葉を溜める胃潰瘍

六十三. 出たがりはみつもないと腹に言い

六十四. お役所は縦割り場当たり言いのがれ

六十五. 痛いのに動け歩けという名医

六十六. 一線を越えちゃいけない恋安保

六十七. 安全を増すか減らすかオスプレイ

六十八. お役所が楽しただけマイナンバー

六十九. 薬飲み副作用出てまた薬

七十. 噴火知りレベルを変える予知レベル

この五十句は平成二十六年七月から平成二十七年九月東葛川柳会機関誌「ぬかる道」の「とうかつメッセ」に入選作として掲載された拙句である。

# 愛知県東栄町役場倉庫火災現場見学記

## 小川千代子（国際資料研究所）



写真1

最近はSNSが情報源となることが増えている。公文書管理にかかわるトピックに関心が集まるようになったのも、最近の傾向だ。

今年二月、役場の倉庫が焼失したというニュースを、知人が書き込んだフェイスブックの記事で知った。この記事は二月一九日付中日新聞電子版、見出しに「公文書保管」の文字がある。

昨今モリカケ問題で公文書管理に世間の耳目が集まっているからか。愛知県北設楽郡東栄町役場の倉庫が火災にあい、そこで保管されていた公文書が焼失したという。これを報じた中日新聞ウェブの記事全文は次のようであった。

「二月一八日午後二時一五分ごろ、愛知県東栄町本郷の町管理の倉庫から出火、木造2階建て約一〇平方メートルを全焼し、周辺の枯れ草約二千平方メートルも焼いた。倉庫は、町役場庁舎の北約七〇メートルで、町の公文書などが保管されていた。

設楽署によると、近隣の男性が「役場の裏の枯れ草から白煙が上がっている」と一九番した。枯れ草の火が燃え移ったとみられる。

町によると、公文書は役場内各部署のほか、役場敷地内の3カ所の倉庫と、燃えた倉庫に保管していた。燃えた倉庫には、作成時期の古い書類が多かったとみられる。村上孝治町長は「週明けに、どんな書類が保管されていたのかを調べる」と話した。町によると、燃えた倉庫はかつて、中学校の校舎の一部だった。約二〇年前から、町が倉庫として使用。一階に道路補修や水道工事用などの資材、2階に文書を保管していた。火災当時は施錠されていたという。」

新聞の電子版が公表されていた時には、火災現場（写真1）が掲載されていた。この写真は中日新聞社のヘリからの撮影とあった。しかし、本稿をまとめようとした段階では、このウェブ記事はすでにアクセス不可となっていて、その時点で知人のFB記事は変化していた。

二月二日（金曜日）に現地見学に出かけた。片道三百kmほどで、湘南の拙宅からは圏央道から東名高速、通行無料の奥三河道路と高速道路がつながり、一般道路の利用距離は二〇kmほどだった。

東栄町役場はすぐに見つかった。一五一号線沿いの静かなたたずまいの町役場は、山肌

沿って建てられていた。その脇の人ひとり歩くのがやっとの細道を上に登ると、つと開けた場所に出た。ここは元の東栄中学校の敷地らしい。

昔の校門の門柱と数本の古木がその雰囲気を与えていた。その中に広がるかなり広い駐車場は役場の利用者向けらしい。旧校門を背に山の方に向かって左手奥の一角は枯草が黒く焦げている。校門の正面少し右手奥には、黄色いフェンスで囲われた「立入禁止」の札が見えた（写真2）。これが火災現場らしい。

近づいてみたら、フェンスの中はすっかりブルーシートで覆われている。そのさらに右にはゴミの分別収集用の建物がある。この建物の左側の外壁は、火災にあったような炎のあと、壁材の熱溶解のような歪みが見えた。そのことから、立入禁止のフェンスの向こう側は全焼した文書の倉庫とみて間違いなさそう。だが、不思議に焦げ臭さは感じなかった。しかし、足元には周辺が焦げて中の方は水濡れになって泥にまみれた公文書らしい紙の束が見えた。右隣の建物の裏手の草むらには、周囲が焦げた印刷物のような紙が一枚、風にそよんでいた。

役場に戻り、飛び込みで総務課長さんに火事のことについて聞いてみた。課長さんからは、前掲の中日新聞の記事と寸分たがわぬ説明を聞いた。

「現在消防と警察が調べている。倉庫が火元

ではないといわれました。二階の書庫には本棚があり、文書は（事務室と同じように）立てていた。文書保存箱などは使っていなかった。文書は古いものが多い。役所から遠いところに古いものを置いていたから。どんな書類が保管されていたのかは現在調査中。」どうやら倉庫には保存期間満了後の文書があったのかも。

東栄町は人口四千人未満、一帯は新たな高速道路建設中だった。数年後にはこの辺の様子は一変するかもしれない。火事の被害が東栄町の歴史に及んでいないことを祈るばかりであった。



写真2 「立入禁止」の焼け跡（撮影 小川千代子）

# 『マドロスの悲哀』、あるいは、

## レファレンスブックの典拠について

### 門倉百合子

#### 【1】『海のロマンス』

私の所属するオーケストラでは、伊藤昇（1903-1983）が1930年に作曲した『マドロスの悲哀への感覚』という曲を、2005年に演奏しました。この曲のスコアには「ヨネクボタチオの作品に拠る」という言葉がフランス語で書かれています。調べたところ米窪太刀雄という人の『マドロスの悲哀』（誠文堂書店、1916）という本があることがわかりました。さらに先行する『海のロマンス』（同、1914）という本もあり、両方古書店で入手しましたが、当時は詳しく読む時間がありませんでした。昨年2017年にこの曲を再演することになり、2年ぶりに書架から2冊を取り出し読んでみましたので、まず『海のロマンス』からご紹介します。

長野県出身の米窪太刀雄（本名は満亮（みつすけ）、1888-1951）は東京商船学校の実習生として練習船大成丸に乗りこみ、1912年（明治45）7月から翌年10月にかけて1年3ヶ月に渡

る世界一周訓練航海をしました。館山を出帆し太平洋を渡り、まず寄港したのは米国サンディエゴ。次に南下して一気に南アフリカのケープタウンへ。それから大西洋を北上し、イギリス領セントヘレナ島へ。更に東へ戻ってブラジルのリオ・デ・ジャネイロへ。そして再び喜望峰を通りインド洋を渡り、オーストラリアのフリーマントルへ。最後はインドネシアを経由して館山に帰港しました。

航海中米窪は詳細な日記をつけており、それは寄港地から東京へ送られ、東京朝日新聞に「大成丸世界周航記」として「太刀雄」の名前で連載されました。文学の素養がある米窪が訓練の合間に書いた文章からは、航海の魅力と寄港地の見聞が活き活きと伝わってくることから、この連載は大評判になりました。この周航記は帰港の翌年に『海のロマンス』という書名で出版されましたが、なんと夏目漱石が絶賛して序文を寄せています。これを読んで船員を目指した

若者がたくさんいたそうです。なおこの本は国立国会図書館デジタルコレクションに収録されています。

#### 【2】『船と人』

米窪は『海のロマンス』出版の翌月にあたる1914年3月、商船学校から日本郵船の実習生として貨客船鹿島丸に乗りました。商船学校はもともと三菱の船員養成校でしたから、日本郵船が米窪に目を付けたのは容易に想像できます。そして5か月に渡り欧州航路を経験し、その航海記を「船と人」として再び朝日新聞に掲載しました。前作は訓練船での航海であり若者の大きな夢を読み取ることができましたが、鹿島丸は客船であり、米窪は客船航海の実態と船員の仕事の過酷さを実体験することになりました。それを率直に航海記に綴ったため、日本郵船から忌諱されてしまったのです。

米窪は帰港後に鹿島丸航海記を『船と人』（誠文堂書店、1914）として出版しますが、献辞はなんと日本郵船社長近藤廉平宛でした。そして航海記本文の後ろにこの本を近藤に献呈する理由として、鹿島丸に乗ることは大変な名誉であったが、その航海により船員生活が嫌いになったことを挙げています。更に「海員問題」として船員の仕事の過酷さ、待遇の悪さを挙げ、その改善方法を詳細に提案しているの

す。つまりこの本は、日本郵船と近藤廉平宛ての公開質問状となっていて、海を愛する若者の一途な心持を読み取ることが出来ます。そして航海中に知り合った東京美術学校教授の岩村透男爵が序文を、朝日新聞の薄井秀一が跋文を寄せ、米窪を支えています。また装幀や口絵には、岩村男爵や朝日新聞と縁のある朝倉文夫、名取春仙、宇和川通諭、岡本一平という名が連なっています。この本も国立国会図書館デジタルコレクションに収録されています。

### 【3】『マドロスの悲哀』

日本郵船はじめ大手船会社から忌諱されてしまった米窪は、1914年10月商船学校を卒業後、松昌洋行という小さな船会社に就職しました。間もなく船長に昇進して経験を積み、それを「マドロスの話」として東京朝日新聞に連載しました。この連載に加筆して1916年に出したのが、全20章からなる『マドロスの悲哀』です。

タイトルの「悲哀」は「ひあい」と読むといかにも過酷な船員物語のようですが、米窪は「かなしみ」とルビを振っています。そして第1章で「船乗りの悲哀（かなしみ）」として、粗食に耐え、不眠と不休に泣き、酒と女から絶縁し、陸上に於ける享楽と没交渉となる、といったことを挙げています。しかしこの本で繰り返し述

べられているのは、魅力あふれる海洋精気（メル・エスプリ）についてであり、読後に残るのは米窪がいかに海に魅入られているか、という印象です。特に第13章では、セントヘレナからリオへの航海途上で見た世にも美しい夕暮の色を詳細に描き、この感動を思い出す度に、「マドロスの悲哀」を忘れる、と書いています。伊藤昇はこの本の6つの章を題材に作曲しているのです。

なお米窪はその後、互光商會を経て労働運動に尽力し、1937年に衆議院議員、戦後1947年には片山内閣で初代労働大臣を務め、1951年に東京で没しました。

### 【4】『マドロスの悲哀』の謎解き

伊藤昇の曲を2005年に演奏した時、『マドロスの悲哀』は船員生活の過酷さを描いた作品で、それがもとで米窪は会社をクビになった、という解釈が語られていました。しかし今回米窪の本を詳しく読んだ結果、『マドロスの悲哀』で取り上げたのは航海中の様々なエピソードであって、船員の待遇の悪さではないことがよくわかりました。ではなぜこうした誤解が生まれたか、演奏会の後に調べてみました。

まず米窪太刀雄（満亮）の経歴について、都立中央図書館で人名事典の記載がどうなっているか調べました。米窪は戦後に労働大臣まで務

めているので、著名な7種類の人名事典に項目がありました。そのうちの3種類に、「日本郵船に入社後、『マドロスの悲哀』など、日本郵船の内幕を小説化して会社を追われた」という主旨の記載があったのです。次にこの記載の典拠をみると、『顧問米窪満亮氏追悼録』という資料があげられていました。そこで海事図書館に赴きこの追悼録を閲覧したところ、次のことがわかりました。

・この追悼録は、米窪が1951年1月に他界した直後に、関係者12人から寄せられた追悼文を収め、同年4月に日本海員救済会から小冊子として出されたもの。

・米窪の第1作『海のロマンス』については12人のうち10人が触れていて、この本がいかに有名であったかを彷彿とさせる。

・第2作『船と人』については、3人が触れ、この本に書いた日本郵船の実習生としての航海経験によって、米窪が労働運動に目覚めたことを指摘している。

・第3作『マドロスの悲哀』には別の3人が触れているが、いずれも『船と人』と取り違えた記述になっている。

・「日本郵船に入社」と書いた人が2人いて、うち1人が『マドロスの悲哀』も取り違えている。

・卷末の「略歴」には、就職した松昌洋行と互光商会は載っているが、日本郵船について一言も触れていない。

この追悼録は全体としては米窪の事蹟を正しく伝えているようですが、追悼文が書かれた1951年は『マドロスの悲哀』を出版した1916年から35年後であり、戦争を挟んで人々の記憶も不確かになっていたことが推測されます。問題作『船と人』はおとなしいタイトルなので、いつのまにか『マドロスの悲哀』がそれにとって代わってしまったのかもしれませんが。また日本郵船には入社していないものの、実習生として航海を経験しているので、それもいつのまにか社員としての経験と考えられてしまったとも推測できます。

以上、『マドロスの悲哀』の誤解の原因が、人名事典の誤った記載により生じたと考えられること、そして事典の典拠となった資料そのものが、誤解されても仕方のない内容であったことがわかりました。米窪太刀雄はいまごろ彼岸で苦笑しているかもしれません。そして前衛的な伊藤昇の曲を知ったら、きっと驚愕したことでしょう。

（本稿は「ニッポニカ・ピオラ弾きのブログ」掲載の文章に加筆し編集したものです。）

# 老人ホーム紹介と川柳

末吉 哲郎

川柳近作

小生このところ学研が設立した5階建ての老人ホームに足の不自由な家内共々入居生活している。南向きの眺めの良い居室である。65才以上の入居者約百名がおり、関東地方に約80棟もある老人マンションの一つである。食堂もあり、係りのスタッフが部屋掃除など手伝ってくれている。

週2回ほどデイサービスと称する会が、近隣の老人も参加してマンション1階で開かれている。入浴サービスの他、脳の老化を防ぐためと称し、計算や記憶力テストの他、体操や輪投げ、最後にカラオケまで用意してある。

「デイサービス」とは和製英語として広辞苑でも紹介されているが、在宅高齢者のための介護援助指導訓練と入浴や食事を提供する通所サービスとして紹介されている。

小生八十才を越え、米寿を目指してこのデイサービスで頑張っているが、輪投げ競技等ではトップ、カラオケでは真打ちの指名があり、昭

和初期の歌を披露している。また絵や川柳の講演の要請を受け、皆の前で話したりしている。

川柳は千葉県は盛んな所で、故人の今川乱魚さんが柏市に川柳会を創設し、全日本川柳協会会長も務めているが、小生も月例会に出来るだけ参加、顧問の肩書きを頂いている。

小生定年まで経団連に勤務し、最後の職域は大手町の新経団連会館の3階のほぼワンフロアを使って設置した公開専門図書館長を務めた関係で、図書館関係の話・団体との関係が深い。とくに小生が主唱し、表彰制度まで立ち上げていただいた図書館サポートフォーラムや企業史料協議会などについての感謝の論評は次回に繰り越すことにし、今回は字数の制限もあり、老人ホーム論と川柳の近作について寄稿することにしたい。

こじんまりまとまるよりも破天荒

過去捨てて巻きなおすには時間切れ

ホールインワン夢の中では何度でも

老兵は消えてもよいがカネは要る

都合よく忘れてしまう老いの知恵

戦争の思い出だけは消しかねる

支え甲斐ある人物は先に逝き

立ち上げに関与の団体意気盛ん

物探しして活気づく認知症

平成をどう識別し次の世へ

最後の土西郷どん上野で犬を連れ

デイサービス和製語ながら良い制度

# 築地から豊洲へ。銀鱗文庫の引越し

福地 享子

関連の出版社での廃棄予定の本の寄贈をお願いしてきた。新刊本が買えない苦肉の策であったが、図書室は、市場と水産のアーカイブスに変身できた。

そして、新市場での図書室存続も、アーカイブスが武器となった。

◆豊洲でも、市場と水産のアーカイブスとして

豊洲市場での銀鱗文庫に割り当てられた部屋は、35平方メートルである。築地市場での広さ、58平方メートルの図書室とバックヤード10平方メートルに較べると、ずいぶん狭い。しかし狭さは望んだうえのことだ。文庫の運営費は、

会員の会費で賄っているが、将来、会員数はさらに減少することが想定される。現に豊洲移転を前に、新市場での営業を断念した会員の幾多もの退会届を受け取っているし、移転後も閉業は続くだろう。東京都に払う施設使用料は、広さに順じており、文庫の金銭的負担を軽くするには、避けられないことなのだ。

実は、図書室としての存続も一時は危ぶまれていた。「これ以上、図書室を維持して行くのはむずかしい」と考える役員は、少なからずいるのだ。

同調するのは簡単なことだ。しかし、ここで改めて文庫の意義を考えることにした。

くころから、図書室の利用は減り、蔵書購入にも勢いがなくなった。本の読み手が減るいっぽう、仲卸の不況で会員数が減少、魅力的な蔵書を増やす余裕がなくなるといふ負のスパイラルに陥ってしまったのだ。

私が、この図書室のお守り役に手をあげたのは、平成20年、図書室どん底時代。会を運営する役員は、一堂に驚いたようだった。それまでの役員縁故で、お守り役を頼んできたものの、給料8万円、古ぼけた書棚とポロポロの椅子と机、訪問者はゼロに等しく、半年で人が変わるといふ状況だった。しかし、私には、ここは

宝の山に見えた。市場の歴史、水産の流れ、かつての水産物の価値観等々、過去を振り返るための資料がいくらかもある。こうした資料を求め、神田の古書店を歩き回っていた私は、内心ホクホクであった。

そして、図書室存続の道を、市場と水産のアーカイブスへ転換、市場内に眠る資料の寄贈、食

7月後半に入った今、私は銀鱗文庫の書棚を埋める本を、段ボール箱に詰めるのを日課としている。銀鱗文庫は、築地市場内にある図書室であり、まもなく開場する豊洲市場への引越しの作業である。午後からの2時間、助っ人は仲卸で働く無口で素直、かつ力自慢の若い衆だ。彼の時間給1500円が高いか安いかわからないが、大いに頼りになる存在であるのほたしかだ。この部屋の本の中身を知っているのは、私のみ。仕分けはさておき、梱包は体力的に自信がない。力自慢とのマンツーマンの作業は、案外スムーズに運んでいる。

銀鱗文庫を運営するのは、NPO法人「築地魚市場銀鱗会」という水産仲卸有志の団体で、まだ法人資格を取得する以前の昭和37年、会の設立10周年記念事業として誕生した。当初は、文学全集やベストセラー、さらに市場や水産などの資料を精力的に買いあさり、多くの市場人が利用する場であった。しかし、平成の声を聞

現在、文庫は「銀鱗会の図書室」ではなく、「市場の、魚河岸の図書室」として、メディアでも頻繁に取り上げていただき、一般の利用者も増えている。通常の図書閲覧のほか、学生や研究者にとってはアーカイブスをベースにした研究の場となっているし、メディアへの資料や情報提供の場ともなっている。また資料を生かしたミニセミナーを行うなど、閲覧だけにとどまっていない。専門性の高い図書があるからこそできる活動である。小さくとも、オンラインワンの図書室なら、きつと生き延びる道はある。今、つぶすのはもったいない。つぶすのはいつでもできる。続けよう、ということで落ち着いたのだった。おそらく、一般書の図書室だったら、存続はむずかしかったように思う。

#### ◆改装費の不足は「書棚寄進」で

豊洲市場の部屋は、床はOA機器対応のタイルカーペット敷き、壁も天井も白い一般的なオフィスである。初めはここに市販の本棚を持ち込むぐらいで考えていた。しかし、図書室として次世代へバトンタッチするためには、時代のニーズに合わせた相応の装備が必要という結論に達した。閲覧だけでなく、情報発信ができる場、セミナーや映像公開、デジタル閲覧、さらにギャラリー機能まで備えることに。たかだ

か35平方メートルにギャラリーとは欲張りのようだが、実は市場内で市場関連の写真やイラストを発表したいというクリエイターは多い。いくらかなりともその需要に応えることができれば、と考えたのだ。

書棚は、スペースに合わせた特注品。床も張り替える。照明もギャラリーコーナーに対応できるように手を加える。展示台も必要だし、無愛想なドアも新調したい。中央には、皆が集う多目的テーブルが欲しい。さまざまなリクエストに応えてもらった結果、大工さんの見積額は800万円近くにもなってしまった。しかし、銀鱗会の手持ちは350万円。何度も大工さんと打ち合わせし、560万円までに落とせた。それでも足りない。クラウドファンディングという手段も考えられたが、不特定多数のひとにか八かでお願ひするのはためらわれた。

人間、追いつめられると、天啓のようにひらめきが舞い降りてくるもので、「お寺の瓦寄進」が頭に浮かんだのだ。そう、文庫の命である、書棚の棚板を寄進してもらおうのだ。お礼に、棚板の裏面に名前を記してもらおう。一口1万円以上はどうだろうか。会う人ごとにこのプランを話してみると、反応は上々である。もちろん、市場内の企業や団体への助成もお願いすることになるが、中心は「棚板寄進」だ。新調してもらう大工さんには悪いが、棚板の裏には、たく

さんのひとのサインで埋まることを望んでいる。サインした方にとっては、新文庫誕生にひと役買った記念となるし、文庫にとっては多くの人に支えられて生まれた象徴ともなる。

新市場の図書室は、管理棟の3階、見学者通路の入り口にある。狭いながらも、さまざまな機能を盛り込み、多くの人が学び、楽しめる工夫を考えた。開場時はまだ蔵書の整理で手一杯だろうけど、年明け2019年には手探りの活動が始まると思う。

# 「情報貧国ニッポン」補遺

山崎 久道

えるものです。また、我が国が、「科学技術創造立国」を目指して科学技術の振興を強力に推進していく上でのバックボーンとして位置づけられる法律です。」

はじめに

三年ほど前、「情報貧国ニッポン」という本を、日外アソシエーツから出版させていただいた。その本で、言いたかったことは、日本では、

研究開発を行い、それを論文にしても、そうした論文を情報として集積し、流通させる仕組みが貧弱なため、そうした仕組みである有力学術雑誌、データベース、電子ジャーナルは、これを、ほとんど欧米の出版社や情報サービス企業に頼っているということである。もちろん、欧米のデータベースや電子ジャーナルが、索引方法やビジネスモデルの確立など、さまざまな面で優れており、全体としても優位性を持っていることは事実であるが、わが国でそうした仕組みが未発達だということは、「情報主権」の面から見ても大きな問題と言わざるを得ない。少なくとも、わが国で行われた研究については、それを情報としてまとめて蓄積し、その上で提供する仕組みを日本国内で持つことが、不可欠

のように思われる。

## 科学技術基本法と科学技術基本計画

「情報貧国ニッポン」では、事実の提示と問題点の指摘が中心で、同時に、その背後に横たわると思われる日本人の精神性について述べている。ただ、制度的な面にはあまり深くは触れなかった。

同書で焦点を当てたもののひとつは、医学を含む科学技術情報の流通の問題であった。科学技術情報の整備や流通に関わるものとして、「科学技術基本法」とそれに基づく五年ごとの「科学技術基本計画」がある。科学技術基本法については、文部科学省のホームページに以下のようない記載がある。

「平成七年十一月十五日に「科学技術基本法」が施行されました。科学技術基本法は、

我が国の科学技術政策の基本的な枠組みを与

同法では、科学技術振興のための方針について規定するとともに、政府において、科学技術会議の議を経て、科学技術基本計画を作成すべきことを規定している。さらに、国が講ずべき施策として、一、多様な研究開発の均衡のとれた推進、二、研究者等の養成、三、研究施設・設備の整備、四、研究開発に関わる情報化の推進、五、研究交流の促進等を挙げている。これらは、「科学技術基本計画」に盛り込まれることになっていると理解される。

四の「研究開発に関わる情報化の推進」においては、その第十三条において「国は、研究開発の効率的な推進を図るため、科学技術に関する情報処理の高度化、科学技術に関するデータベースの充実、研究開発機関等の間の情報ネットワークの構築等、研究開発に係る情報化の促進に必要な施策を講ずるものとする。」（傍線引用者）と述べられているように、データベースの整備が重要課題として挙げられている。

データベースについての記述は？

同法に基づいて策定された第一期科学技術基

本計画（一九九六年）では、「また、高度情報通信社会に対応し研究開発活動の高度化を図るとともに、研究開発活動の現状や成果等を広く内外に発信していくため、各研究開発機関における情報通信基盤の整備、大学間、国立試験研究機関等の情報ネットワークの整備、科学技術に関するデータベースの整備等を進める。また、研究開発活動や研究の企画立案、評価等に活用できる研究者及び研究資源に関する案内情報のデータベース化を促進する。」（傍線引用者）と、データベースの充実がうたわれている。さらに、以下のような具体的な施策の記述もある。

「二、科学技術に関するデータベースの整備  
科学技術活動の基盤となる論文等の文献データ、各種実験・観測データを含むファクトデータ等及びそれらのデータベースの着実な整備を進める。特に、国立試験研究機関、大学、学協会等が行う科学技術に関するデータベース化活動に対する支援活動として、平成八年度より科学技術振興事業団において新たに着手する研究情報データベース化支援事業を拡充するとともに、大学等の研究者に対するデータベース化支援・維持経費の拡充及び文部省学術情報センターを中心とする支援の充実を図る。電子図書館システムの研究開発を推進し、大学の図書館に電子図書館的機

能の整備充実を進める。

研究活動や研究計画立案、政策立案等に活用できる各種資源に関する案内情報のデータベース化を促進し、順次内外の研究者への提供を進める。」

データベースを、研究開発のための不可欠の情報資源として捉える姿勢が明確である。第二期の科学技術基本計画（二〇〇一年）でも、この点は堅持されている。ところが、第三期（二〇〇六年）、あるいは第四期（二〇一一年）になると、データベース整備は、記述はあるものの特定目的のものについての記述が中心になり、「全面的なデータベース整備」という記述は後退している。第五期（二〇一六年）でも、この傾向は変わらず、研究開発活動を支える重要資源としての位置づけは、弱まるというか、極言すると、放棄されているようにも見える。思うに、インターネットの普及によって、データベースの役割は大きく減じた、もしくは終了したというような認識なのであろうか。データベース整備は、科学技術の発展や研究開発の進展にとって、重要課題ではないのか。それとも、もはや、データベースはわが国では十分に整備されたということなのか。

### データエコノミーの到来

一方、最近では「デジタル資本主義」「デー

タエコノミー」など、情報が中心になる、あるいは力の源泉となる経済システムの到来が、あちこちで喧伝されている。日本でもさまざまな議論が行われているように思われる。ただ、そうした議論は、データを扱う技術についてであったり、そのためのソフトウェアの開発についてであったりする。しかし、技術やソフトウェアとともに、あるいはそれ以上に重要なのは、その中身である情報やデータである。もちろん、ビッグデータとのからみで、オープンデータ、個人情報などの議論は、それなりに活発である。しかし、整備され、きちんと索引付けされたデータベースなどの話は、きわめて低調である。近年の「科学技術基本計画」は、そうした傾向を反映しているように思われる。いくらシステムが優秀であっても、ゴミのような情報はやはりゴミでしかなく、価値の高い、有効な情報を選別して整理したうえで保存するデータベース、図書館、出版といった仕組みの重要性を忘れてはならないと思う。

## 【改稿転載】若き図書館員とこれから図書館員に

### なろうとするとするあなたへ送りたい10のメモ

水谷 長志

〔本稿の由来〕2018年3月末日をもって30余年の勤務地である竹橋を離れて、4月より、新座と茗荷谷にキャンパスを置く跡見学園女子大学の文学部人文学科に着任して、司書課程を担当している。その転籍の実効の前から、以前、『専門図書館』の編集委員をともにしていたI君から依頼されていた、キハラ(株)発行の『LI SN』の原稿、「連載・ベテランの方から若手図書館員へのメッセージ」に思いを巡らしていた。

4月からの新米教授は、日々、司書課程の科目である図書館概論、情報サービス論、図書館制度・経営論などの講義準備に追われて、依頼の原稿は、なかなか手つかずのままにいたが、『L I S N』の7月初旬のメ切的頃には、もう春学期の試験を視野に入れなければならない時期を迎えていた。

この『ふおーらむ』を手にとられる方々は、とうにご存知のように、司書の資格を満たして

も、なかなか正規の職を図書館に得ることは、実際のところ難しい。その現実に怯みながらも、既定の科目を講じ、なおかつこの連載の原稿を書くことの心理的抵抗感はかなり高かったが、題目とした「若き図書館員とこれから図書館員になろうとするとするあなたへ送りたい10のメモ」の項目はいずれも、通勤途中のとあるカフェで、5分ともかからず思い浮かんだものだった。日頃、教場では簡単には言い得ないことも含んでいるが、かなり本音の10の「若き図書館員とこれから図書館員になろうとするとする」後進へのメッセージであるとともに、図書館サポーターフォーラムの先輩へお伝えする近況報告でもあるので、キハラ(株)さんの『L I S N』編集部に無理を承知でお願いして、以下、本誌へ転載させていただいた次第である\*。

\*初出『L I S N』177号(2018年9月刊行予定)

30年を越えて美術館の中の図書館員(アートライブラリアン)として日を送った。ライブラリには常に複数のスタッフがいたので、ワン・パーソン・ライブラリアン(OP L)ではなかったが、P D C Aのサイクルはすべて自己完結していたので、気分は十分、O P Lだった。「O P Lだった」が故に、外との関係を意識して求め、行動した。その帰結として、この春からとある女子大で図書館学を講じているのだが、大学の先生というのも個人営業の店主みたいなものなので、O P Lであることは一向に変わらない。編集者に求められて、同時に本務校の学生へ送る気分で、以下の10のメモを書いてみた。いささかでも参考になることがあれば幸いである。

1. 志を同じうする仲間を持つ

美術館の中のライブラリアンとなつて2年目の1986年、I F L A 東京大会に遭遇したことはこの上ない幸運だった。当時の日本には、欧米のA R R L I S S のような美術図書館員のための横の組織は無かったが、これを機に、現在のJ A D S (アート・ドキュメンテーション学会、1989年の創設時は研究会)が誕生した<sup>2)</sup>。発足時、多分に同志的連帯から誕生したこの会の活動を通して、どれだけ目を開かれたことか。

2. 媒体は何であれ他者の目に触れる原稿を書く

大学では歴史と図書館情報学を学んだが、美術史には素人だったから、美術館の学芸室はまさにジョージ・オーウエルの「動物農場」<sup>アニマルファーム</sup>のように見えた。幸い、私より2・4年ほど年長の兄貴分が数名いて、彼らが競って館の内外の媒体に原稿を、昼の勤務をこなしつつ徹夜しながら書き上げていた。私も做って、館のニュース誌やJADSの刊行物に、背伸びを承知で原稿を書いた。大方は無視されるが、書けば他人の目に触れる、批評もされる、たまにはお褒めの言葉もいただける。書くことで頭の中が整理される、課題も見える、何よりも自分の足りなさへの気づきが生まれる、一歩先へ進む「キッカケ」にはなる。

3. たくさんの図書館を見て歩こう
4. さらに多彩な類縁機関 (Museum or Archives) を見て歩こう
5. 見て歩く範囲を、なるべく早く、海外にまで広げよう

強くMLAの多様性について思う。MLA diversity! MLAには、一つとして同じ館はないのである。館の外へ出て、多彩なMLAを見て歩こう。できたらなるべく早いタイミングで、海外のMLAにまで足跡を広げてみよう。一人で出ることを勧めたいが、IFAや国内外の学協会の大会への出席を機にするのも良い。たいていエクスカッションが組み

れているので、初めての人とバスの席を隣りしたりして、思いがけない話に花が咲く事だつてないわけではない。レセプションのパーティ英会話は、なかなか難しいけれどもね。

私の恩師の故藤野幸雄先生の先生、UCLAで師事されたパウエル教授の言葉が、遺著『図書館 この素晴らしき世界』に書き記されている。「どの都市を訪れても、まずは図書館に行け、名所旧跡などは二の次でよい。図書館では市民の顔が見られるから……ここには長時間いすわつていてもよいし、昼寝をしてもよい。第一に、無料であり、出入りが自由である。公的機関なので食堂は安い」と。孫弟子として、私もパウエル先生の言葉を信奉し、遵守している。加えて、図書館には、特に海外では、安全なトイレ<sup>(3)</sup>トがあつて、時に有料であつても、大変助かるのである。

6. 多少の身銭は切つても字ほう

JLAでもINFOSTAでもいいのだが、図書館関係の、できたら月刊誌を自前で、身銭を切つて購読しよう。雑誌から雑誌へ情報はつながり、興味が向いたら図書館で他誌を覗くがよい。多くは特集主義で編集されているので、近時の斯界の動向と課題が見えてくる。司書の採用試験の問題もこら辺りに集中するのは、その問題の作成者の多くが、これら雑誌の編集委員だったり、寄稿者だったりするからである。

彼らの手の内はこらあたりにあるのである。

7. 韋編三絶<sup>(4)</sup>するよな私の一冊を持つとう

三絶はしないが、常に私の身近には、新潮、中公、講談、そしてスマホには青空文庫版の三好達治の詩集がある。通勤電車を逆向きにふいと乗りたくなるのも、紫陽花が好きなのも、お大晦日の晩を京都で年越ししたくなるのも、三好達治の処女詩集「測量船」の最初の見開きの頁に慣れ親しんできたからである。できたら古典や詩集の一冊を私の韋編にすると、それが精神と心の立ち帰りの原器となつて、我が身を安心させ、回復させてくれるよすがともなる。何よりも図書館の利用者の声を聞き易くする。

8. 異なる年代の知人を持つとう

いささか寂しい気もするが、私もJADSの中では、相当の年配の部類に入るのであるが、図書館サポートフォーラム<sup>(5)</sup>では、まだまだ若輩である。図書館界の先達のみなさまのお元氣さに驚嘆しつつ、私の背が新たに押される気分がする。同世代の同志的連帯とともに、上下に世代の異なる知己との交流は、常に精神をリフレッシュしてくれる。

9. 常にインサイドであろうとしよう

映画『ウォール・ストリート』の一作目(1987)で、投資家ゴードン・ゲッコーがチャーリー・シーン扮する野心に駆られる新人証券マンのバドに送った言葉が、If you're not

inside, then you're outside, ok?」である。インサイドに入らなければ、いつまでもあなたはアウトサイドだ。その気になれば、機会はいくらでも、ころがっているほどにある。飛んで火に入るのは怖いものだが、転げても手を差し伸べてくれる先輩がいるのが、図書館の世界のいいところであって、何とかなるし、何よりも転げてくるような少々慌て者くらいの若手こそ歓迎されるのがこの世界だ。

#### 10. 最後に―「塞翁が馬」ということ

文化庁から補助金を得て、とあるプロジェクトを立ち上げて、2014・16年の3年間は、毎年60日以上も海外に出ている。<sup>(6)</sup>

旅は、徹頭徹尾、ことごとくに自己責任の選択の連続である。あの時、あの道を選ばなかったら、いつも帰国の飛行機の中で、毎年のプロジェクト報告書の編集校正をしながら、何度振り返り、思ったことだろう。あの時、あの選択が間違っていたとしても、その代わりに、あの人に出会えた、あの風景に巡り逢った、あの店であの一杯のグラスに辿り着けた、などなど、「人間万事塞翁が馬」である。回り道も迷い道も、その積み重ねこそが、みなさんの未来を築き、切り開いていくことをお伝えして、この稿の仕舞いとして。

(1) ARLISとは美術図書館協会、ART

Libraries Society、1969年の英国を皮切りに、北米、欧州各国、オセアニアなどに誕生。

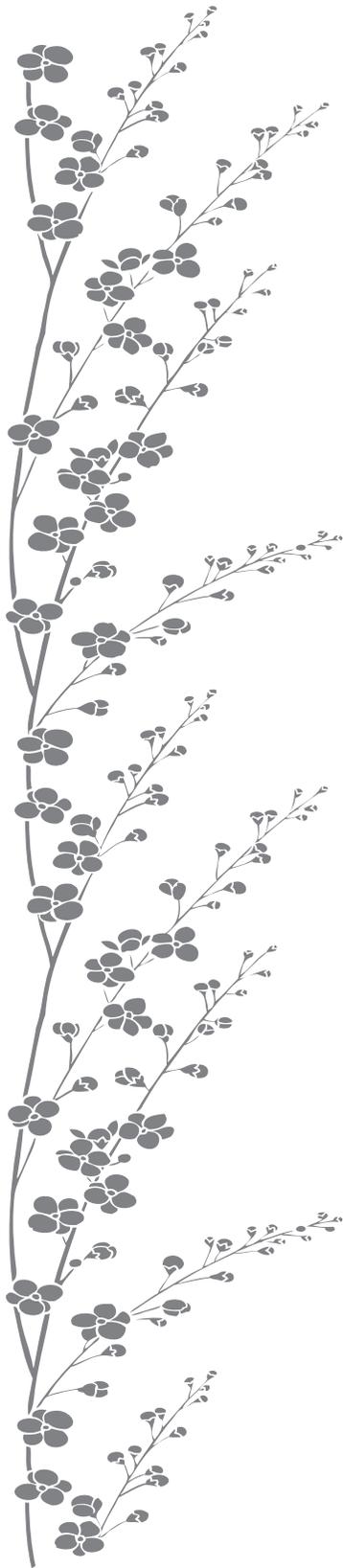
(2) 1989年創立。http://www.jads.org/

(3) 勉誠出版、2008、p. 12-13.

(4) 「史記孔子世家」の故事、「韋編」は文字を書いた木簡竹簡を皮のひもで綴った古代中国の書物。

(5) http://nichigai.co.jp/lib\_support/

(6) 通称JALプロジェクト。http://www.monat.go.jp/am/library/jal2016/



## 編集後記

「ふおーらむ」15号をお送りします。

今年は春から大阪府北部地震、西日本豪雨と災害続きでしたが、編集を進めている最中に台風21号による関西空港の閉鎖、北海道胆振東部地震と立て続けに衝撃的なニュースが飛び込んできました。

それに加えて1946年統計開始以来の記録的猛暑と、日本列島全体が心身ともに堪える、記録にも記憶にも残る年となりそうです。

遅めの夏休みは北海道に行く予定だったのですが、地震のため交通機関が遮断されてしまったので取り止め、三陸沿岸と以前から行きたかった山寺(やまでら)に参りました。

津波で流されBRTとなった気仙沼線経由で、開館準備で訪問して気になっていた気仙沼市の新図書館、建設中の南三陸町の新図書館を足早に拝見しました。未だに街のいたる所で護岸工事をしているのを見かけると、改めて7年前の被災の根深さに嘆息します。

山寺(宝珠山立石寺)は、松尾芭蕉の『おくのほそ道』で最も有名な句といってもよい「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」が詠まれた場所ですが、悪縁切りのパワースポットとしても有名です。

天災は縁ではありませんし、神頼みで解決するものではないですが、悪縁は「切」って、良縁を「結」びたいと思いを強くする旅でした。(岩本)

昨年から練馬区に30平米の野菜作り農地を借りた。西部池袋線の大泉学園である。区の生産緑地計画の一貫で練馬区在住者を中心に利用され、空きがあれば区外の人にも貸し出している。僕は区外であるけれど、昨年1月末に申し込んだら偶然残り最後の一つを引き当てたのだった。

最初の1年は野菜作りに振り回されたが今年は少し余裕ができた。そうすると葉物野菜の他に、ズッキーニ、キュウリ、トマト、茄子が取れる。夏場は10cmのズッキーニが一週間後40cmに巨大化する。家が農園近くなら二日置き位に行って、適度なものを採集出来るが、僕が行けるのは週に一度が限界のため、胴回り20cm弱長さ40cmのズッキーニを3~4本持ち帰ることになる。

40cmのズッキーニをどう処理するか、皮目をトラ刈りにして半分に輪切り、縦に4等分して種部を大きじですくい取る。たっぷりのマスタードと砂糖で数日漬ける。アトはタッパーで冷蔵庫に保存。ニンジンのグラッセから思いついた、わが家の、夏の一品である。(森本)

## ふおーらむ 第15号

2018年10月10日発行

発行人 山崎久道  
製作 森本浩介／岩本謙一／尾崎みやま／赤田麻衣子  
発行所 図書館サポートフォーラム  
〒140-0013 東京都品川区南大井 6-16-16  
日外アソシエーツ(株)内  
TEL.03-3763-5241 FAX.03-3764-0845  
[http://www.nichigai.co.jp/lib\\_support/index.html](http://www.nichigai.co.jp/lib_support/index.html)

